

アクセスが向上したため、東京方面への通勤者が増加するという「東京」の影響も強くなるようになった。空港開港時はもちろん、現在でも「空港」の影響は成田市にとって非常に強いものであることには変わりはないが、「東京」の影響も徐々に強くなってきていることがわかった。

北太平洋北西部における 台風経路について

片岡久美

日本は、台風の移動経路上に位置し、毎年必ずと言っていいほど、台風の上陸・接近がみられる。台風の上陸・接近によって、日本は、様々な被害に見舞われるため、台風が日本に上陸・接近するかしないかは、人々の大きな関心である。そのため、台風経路の研究には以前から力が注がれてきた。

本研究では、台風についてより定量的に把握することを目的として、5° ずつの緯度先を通過する際の台風の特徴を調べる。

使用する資料は、気象庁発行の『TROPICAL CYCLONE TRACKS IN THE WESTERN NORTH PACIFIC 1951-1990』。この台風経路図から、1961年～1990年の30年間に、日本を中心とした北緯25°～45°、東経110°～180°の範囲内において、北緯25°、30°、35°、40°、45°の5つそれぞれの緯度線を通じた台風すべての、日付・経度・気圧の値を読み取り、個数とともに、平均・頻度分布の集計を行った。

また、考察においては、集計した平均値を基に30年間の各年について、個数・日付・経度・気圧それぞれの特徴を、30年間の平均値に対する大小で表わし、それぞれの特徴の経年変化やパターン分けを考えた。

その結果、年毎の台風の特徴の経年変化としては、個数は減少の傾向があること、日付は早い年と遅い年の周期が短くなってきていること、経度に関しては、西寄りと東寄りの

2年周期が見られるが、70年代はずっと東寄りだったこと、また、気圧は強い年と弱い年の周期が長くなってきていることなどが分かった。

パターン分けにおいては、台風を個数・日付・経度・気圧などの要素で表わすことで、30年間に{強・西・東}と{弱・東・遅}の2パターンが多かったことや、30年間の中で同じパターンが現れる回数をまとめた。

現在、台風の研究の中で注目されているのが、温暖化による影響である。注目を浴びているのは、温暖化によって台風が減少するという説だが、本研究においても年別による考察で、同じような結果が得られた。

緯度線5° 毎における台風の基礎資料はそろっているため、今後は年別の集計だけでなく、月別の集計や、経度・気圧別の集計なども行ない、考察を深めていけば、より温暖化などの影響を裏づける結果も得られるであろう。

駅前放置自転車に関する要因分析 —東京都内主要駅を例にして—

工藤加乃

利用する駅周辺の放置自転車の状況を筆者自身が見てきて「駅前放置自転車を発生させる原因は何であるのだろうか」というのが本研究の出発点である。そこで、東京都から発行されている『駅前放置自転車の現況と対策』(1997)、『今後の放置自転車対策のあり方に関する調査研究報告書』(1996)を参考に、東京都内の駅周辺をフィールドにして、数字による分析で駅前放置自転車が発生する要因を明らかにするというのが本研究の目的である。

調査対象となる駅の選定は、東京都の『駅前放置自転車の現況と対策』(1997)に記載されている駅を対象に、乗り入れ台数3000台以上の駅を抽出し、それらの駅の放置率を求めた。放置率が一桁台から始まって90%台までそれぞれ1つずつ駅を選定する方向を取っ